一　次の文章を読んで、後の問に答えよ。

「むなしさ」というのは、自分の欲したものが得られない、あるいは、手に入れたと思ったものが失われてしまったという喪失感と関係しています。

「むなしさ」を理解するために、a便宜的に①二つの種類に分けて考えてみます。

一つは、何か大切なものや欲しいものを探しているのに中身が見つからない、あるいは、相手に何かを期待していたのに裏切られた、もしくは、愛していた相手が亡くなってしまったといった、自分という存在の外側に空虚なものができてしまう場合です。外に何かを求めていたのに、何か意味のあるものが得られなかった。そんなときに感じる外的な「むなしさ」です。コンサートやゲームで、楽しいことが終わってしまった「祭りの後」にも、これを感じやすい方がおられるでしょう。

もう一つは、自分自身に価値や中身がないのではないかと感じたり、自分が生きている意味がないと感じてしまったりする場合などに訪れる内的な「むなしさ」です。このような場合には、自分の内側に空虚なものが生じています。自分の心の中にぽっかりと穴があいてしまい、どうしてよいのかわからないというときの「むなしさ」です。

ただし、②この二つは完全に分けられるものでもなく、多くの場合、連動して起こります。

A、大事な相手が亡くなってしまったという場合、もし相手と相思相愛の関係にあって一体感が強かったり、あるいは、相手に対する依存が強かったりすれば、相手の死は自分自身の喪失にもつながってしまいます。自分の生きている意味もわからなくなり、希望も見出せず、心の中にぽっかりと穴があいてしまい、どうしてよいのかわからなくなってしまいます。

この分類の仕方は、フロイトの精神分析の知見を応用しています。フロイトも喪失という経験を、同じように二つに分類して考えました。前者の喪失、すなわち自分の外側にある物や人を失った場合、あるいは、探しているものが見つからない場合などを、フロイトは「対象喪失」として論じました。

この喪失した対象が、いま述べたように、たとえば自分と愛し合っていた人など、自分と一心同体的な存在だとすると、自分自身が深く傷つき、自己を喪失することになってしまう場合があります。フロイトは、単なる「対象喪失」よりも、それが後者の「自己の喪失」へと連動するほうがより深刻であるとしています。

つまり、依存心や依頼心が強く働いている関係における対象喪失が、この身に深刻な事態を招くことになります。したがって、自分というものがなく、周囲に影響されたり、左右されやすく、外側の世界に強く依存していると、それが失われたとき、深刻な「むなしさ」や空虚に陥ることになってしまいます。つまり、外も内も空っぽになるわけです。

鴨居玲という画家がいます。自己の内面に眼を向け、自身の心の叫びや苦悩を表現する作品を多く描きました。おそらく自死によって五七年のcショウガイを閉じたとされています。

私は、彼ほど「むなしさ」を自画像として描き出した作家はいないと考えています。彼の作品を観ると、相手に対する「むなしさ」と、自分に対する「むなしさ」が連動していることが、視覚的にとても理解できるように感じます。

一九八五年の作品「肖像」(図1)では、周囲に見えている表面的な自分の顔を外すと中身がない、つまり表に対応する裏がない、という形で「むなしさ」を表現しています。

そして、もう一つの一九八〇年の作品「しゃべる」(図2)では、③「言葉のむなしさ」を描いたとされています。作者自身と思われる男の口から蛾が飛び出してきています。しゃべれば、しゃべるほど、言葉はdミニクい蛾となって飛び散ってしまう。彼自身もこの作品について、言葉の「むなしさ」を表現したと語っています。

言葉を話すということは、人が生きて他者と関係を築き、社会の中に自分を位置付けてその居場所を獲得していくうえで、とても大切なことです。すなわち、言葉は自分の肉体や人生そのものと連動しているといっても過言ではありません。

ところが、鴨居玲は、その舞い散る言葉が自分の肉体から切り離されてしまい、自分自身の思いが相手にはまったく伝わらないものとして描いています。おそらく自分も空っぽで、人間関係を築くはずの言葉にも意味がなく、それに伴い自身と外部との関係性が絶たれ、そしていっそう、自分自身が中身のない空っぽのものだと感じられる。表現そのものさえも、むなしい。彼の作品およびその生き様は、彼自身のそんな深刻な思いを私たちに語りかけてくるように思えます。

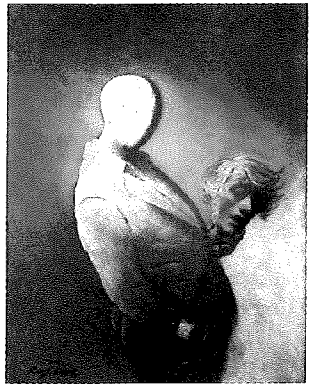

図1　鴨居玲「肖像」
『「むなしさ」の味わい方』より

図2　鴨居玲「しゃべる」
『「むなしさ」の味わい方』より

鴨居玲の二つの作品を観たとき、外に対する言葉の「むなしさ」が、自分自身の中身が失われたと感じられる「むなしさ」と連動していることが視覚的にもうかがえるでしょう。

相手と関係性を築いていくはずの言葉がむなしい。いくら話しても、相手に伝わらない。私も表現者の一人として、そのことを若いころに経験していました。

民俗学者の柳田国男の説によれば、「おもしろい（面白い）」という言葉の語源には、聴衆の「面が白くなる」という意味があるといいます。「面」というのは顔のことです。その昔、語り部が[e]囲炉裏を囲んで話をしていたところ、おもしろい話に聞き手が顔を上げて、その顔が囲炉裏の光に照り返されて白く輝いて見えたというのです。

私自身も音楽活動やその他で、人前で表現活動をする機会がたくさんありました。私の興味深いパフォーマンスに対して観客が喜んでくれたとき、確かに観客の顔がパッと明るくなったと感じられる瞬間があります。そのことに手応えが感じられ、私のパフォーマンスそのものにも良い影響を与えてくれます。まさに相手が輝いて「面が白くなる」のを実感するところです。

しかし、これとは逆に、相手に自分の意図が伝わらず、相手の反応が得られないというのは、やはり言葉をしゃべることに[f]甲斐がなく、とてつもなくむなしい経験です。話しても、伝えようとしても、相手の反応がなく、それによって相手との関係が冷え込んでいってしまうことで、自分には価値がないのだろうかと、自分自身さえもむなしくなってしまいます。

そもそも自分の意思が必ず相手に伝わるということはなく、手応えのないことがたくさんあります。［B］、相手が自分の言葉を聞いていないこともあります。しかし、そうしたズレは、他者と付き合うなかで避けることはできません。したがって、誰もが相手との関係性に敏感であれば、必ず「むなしさ」を感じますし、多かれ少なかれ、自分自身についても「むなしさ」を覚える経験からは逃れられないのです。

［C］、いまSNSの時代となり、そうした「むなしさ」をできるだけ回避しようとする行動が、あちこちで起きているように感じられます。

たとえば、ツイッター、あるいはいまの「X」で何かを発信する。そうすると「いいね」という形で、視覚的に反応が見られる。「いいね」の反応が多いととても嬉しいし、逆に反応が少ないと、ひどく落ち込んだり、[g]アセったりする。そして、どうすれば「いいね」が増えるか、いろんな発信を試すようになる。相手が驚いたり、喜んだりするような発信をすれば、「いいね」が増える。ものすごく多くの反響を得られた場合、「バズる」などといいますが、多くの人がSNS上で「バズる」ためのゲームを繰り広げている感さえあります。

発信する側にとって、この反応が一種の生き甲斐のようなものにさえなってしまっているのです。そして、相手の期待に応え、反応が増えるほど、自分も充実したような気になれます。逆に、私たちは、相手からの答えや応えの、ズレにはますます神経質になっている。

私たちはメールの返事が来ないだけでも、相手から嫌われてしまっているのではないか、と不安になります。SNS時代になり、私たちは、他者の反応、つまり応えを敏感に意識する、あるいは、意識しすぎる社会を生きているのです。

ここでいう「相手の反応」というのは、生き生きした「面が白くなる」という現象とは質が違っています。SNSでの反応というのは、目の前に他者がいて、生身の他者の反応を直に感じるのではなく、「いいね」の数という、視覚的な記号や数字として認識しているのです。メールの返事なども、顔文字などが多用されていたりもしますが、基本的には記号であり、相手の表情はうかがえません。

実際のところ、「相手の反応」に敏感すぎる時代でありながら、若い人たちなどのリアルな場でのコミュニケーションを見ていると、一部のマスコミ関係者と同じだなと思うのです。［D］、自分からはたくさん言葉を発しながらも、相手の話はまったく聞いていないという場面がよくあります。また、一緒の場にいながらも、相互のコミュニケーションに取り組むことをほとんどせず、それぞれがスマホに向き合っている場面も多いです。

すなわち、「相手の反応」に敏感すぎる時代を生きていながら、発信する言葉や情報が相手に届いて理解されているという点に重きが置かれているわけではありません。むしろ、かつてとは比べものにならないほど[h]ボウダイな言葉のやりとりがなされていながら、鴨居玲の作品に描かれているように、蛾のように飛び散っていく、むなしい言葉ばかりが氾濫しているように感じられます。

自分の内面と裏付けられた言葉を相手に伝えるというのではなく、相手の反応を引き出すための絵文字のような刺激的な言葉ばかりが拡散されている。意味を伴っているはずの「表意文字」としての言葉が、いつの間にか、意味をもたない、ただの記号としての「表音文字」になってしまっている。そして多くの言葉が読まれないまま、無意味化して氾濫しているのです。

フェイクニュースなどが氾濫するのも、共通した現象です。意味として事実を伴わない、裏付けのない情報が氾濫しているのです。

鴨居玲の作品に学べば、この目の前の状況こそ、本来的にはむなしいと気づくはずです。でも、相手の反応を際限なく引き出すことで、表面的に「むなしさ」が感じられないようにふるまっている。しかし、それもわざとらしく感じられると、ますます意味がなくなる。それが、④「むなしさ」をめぐる現代社会の状況ではないでしょうか。

（きたやまおさむ『「むなしさ」の味わい方』による）

問一　傍線部a～hのカタカナは漢字に、漢字は読みをカタカナに、それぞれ改めよ。

問二　空欄A～Dに入れるのに最適な語を、次のア～キから選び、記号で答えよ。ただし、それぞれの記号は一度のみ用いることができる。

ア　あるいは　イ　ところが　ウ　したがって　エ　むしろ　オ　つまり　カ　では　キ　たとえば

問三　傍線部①について、「二つの種類」の「むなしさ」とはどのようなものか。本文に即して、それぞれ三〇字以内でまとめよ（句読点・かっこ類も字数に含める）。

問四　傍線部②について、二つの「むなしさ」は、どのように「連動」するのか。本文に即して九〇字以内でまとめよ（句読点・かっこ類も字数に含める）。

問五　傍線部③「言葉のむなしさ」とあるが、筆者が、二つの「むなしさ」の連動において、「言葉」に注目しているのはなぜか。本文に即して七〇字以内でまとめよ（句読点・かっこ類も字数に含める）。

問六　傍線部④「「むなしさ」をめぐる現代社会の状況」とあるが、それはどのような状況か。本文に即して一〇〇字以内でまとめよ（句読点・かっこ類も字数に含める）。

問七　次のア～オの記述のうち、本文の内容に合致するものをすべて選び、記号で答えよ。

ア　楽しいことが終わってしまったときに感じられる「祭りの後」の「むなしさ」は、「対象喪失」の一例といえる。
イ　フロイトは、「自己の喪失」に比べ、自己の外部の物や人を失う「対象喪失」は深刻ではないと指摘している。
ウ　相手に対する一体感が強まる相思相愛の関係は、自己の外部にある存在が大切で大きい状態といえる。
エ　「おもしろい」という言葉は、もともと目の前の相手が笑顔になる状況を指し、自分と相手の関係性を含んでいる。
オ　SNSにおいても「表意文字」の比重を増やしていくことで、無意味な「表音文字」の氾濫を避けることができる。